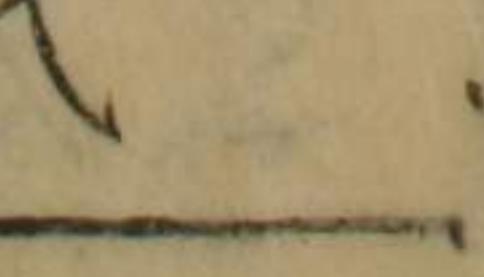
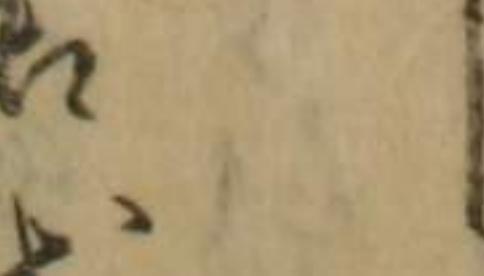
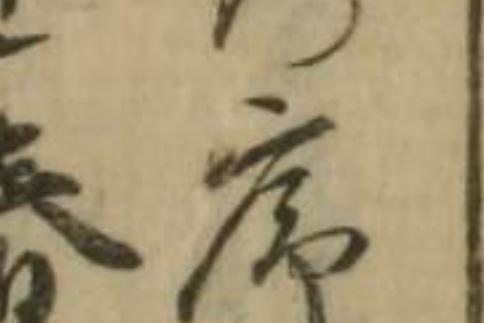
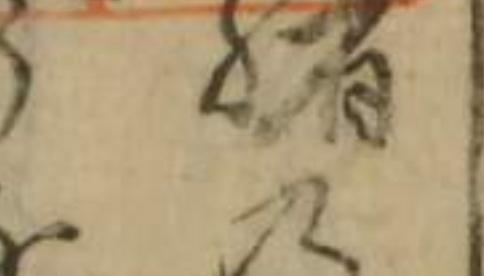
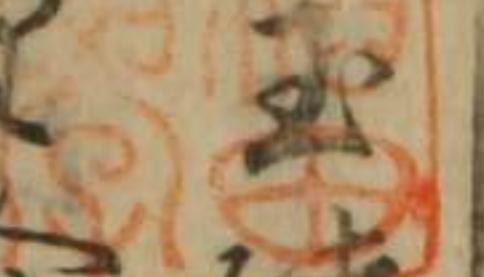
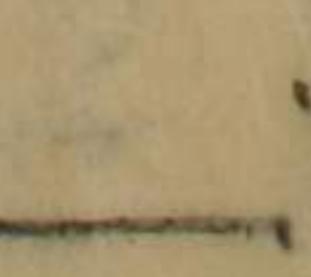
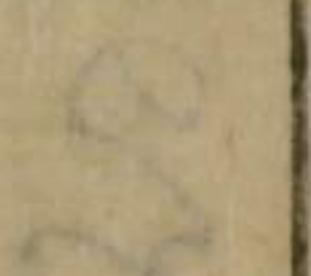
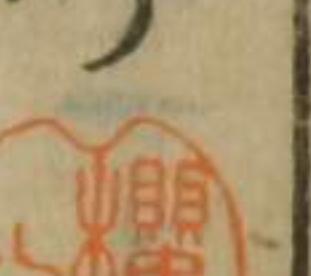
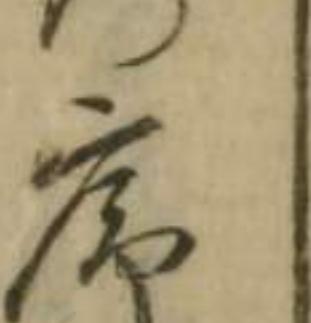
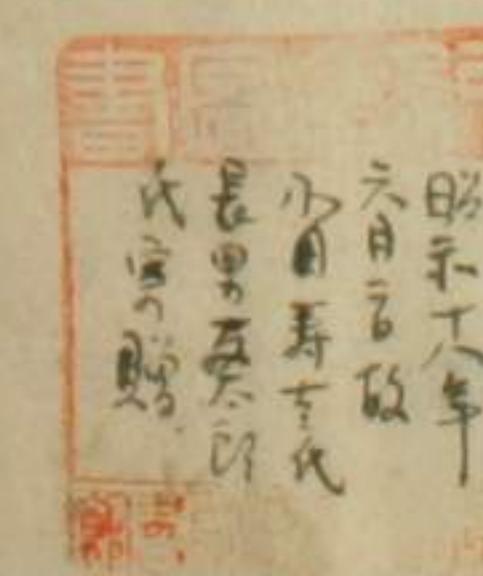


七丹口



讀書  
諸乃序  
やくもて今を參とのどある時代  
乃久くふそくや此言葉乃花もふほ  
ひまわりて。ややじどなきころひよ  
をきありけ。もはあれども景さくやあ  
る山のふのふあさうひまわじめがど  
ら。う。たとえとあじくしきもじお

ちよかよまをはのとものすもくら  
がの山道やまこゆもやうそ。さとす  
みが人の黒ひだ。やじろともやくわすこ  
とふ此いさくうちあぐらかす。あらと  
ぞ黒ひえ。わ。れよまくぬのまごゑあ  
しるからして。ともたちたぐくわせ  
すを。スウモラガモ。一もとのあら。

翁は姫にのみをほくほまいり。又  
えきれて。あまれさも、あーさも。とく  
きもとさあせ。とくとく。師の志。お  
くふきと。きのね。かね。けり。まき。ののかぎ。と。野ふぢ  
もと。でも。つても。ぬくまく。ゆき。め。あ  
さ。ふもと。よ。此と。さり。を。ゆく。思ひ。

まうひて。まごろいを此くふうせの  
をふくとせてしがちうむとよみの  
まゆやふゆわもやへまうりくまゆ  
まうりくあまびぬ鏡といひさ、うかは  
一まきをはづアとて。まうひろゑくま  
アトをかゆほまひら、よとて。まうき  
なまきとの玉やかひやとぞうひあり先。

りづみのねの志げき官本うどやく引い  
で。ねの毛壁のいろくつゝみけ。もあ  
ちどりはあとさく、とよもかきつゝは  
まひる。此ふもせよをうまうて。とみこ  
ろをこまきまくちうかば。とふをはがとの  
はあきゑのあとちうかくとも。まよよもら  
あくとけかくまくとよもあくともと。

豈ちやかとよ定め。まほのまよ  
ゆふをの。がくくもくとくまつりて。  
道のちくべとあくあくもと。のうびきへる  
おれらぐくす。むかへこせがくか  
ほえあ。ちくあきかくらのあまく  
せんまとほむらまみ。まほみく  
まつかき。まづ。

福應大平

玄蕃抄のきの序

此の文のやよ。互の法うも洗うる  
より。人の身はうをも。あは  
あ乃ふをも。うをも。身す  
あれいや。きほじくふ。みもふを  
かしりの。いみれにあかくらふ  
たやうは。けれど。行ふねうよ

あ。みドか。ち。も。ゆ。み。ま。か。  
い。も。じ。そ。て。の。ゆ。び。き。あ。ま。も。ま。び  
そ。ま。が。そ。く。り。う。を。う。つ。き。ま。ま。よ。の  
常。波。と。へ。あ。ん。た。と。と。と。と。ひ。な。ま。ま。  
と。い。と。か。ぎ。り。お。く。ま。ま。ま。ま。  
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。  
ん。ち。る。に。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。  
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

一。き。は。の。先。も。そ。つ。ま。ね。べ。く。ま。  
も。え。な。く。ま。え。で。も。え。く。ね。べ。く。  
は。じ。は。じ。を。ば。あ。い。と。歌。の。え。す。ま  
ト。れ。あ。う。は。有。う。れ。ま。で。ま。う。歌  
く。ス。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
い。ふ。め。ぐ。く。ち。ま。め。か。び。り。ま。ま。ま。  
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

まく。妙めきらめくとふとはまく  
ん。うもかくもあらうとまくちを

えとまくへとまく

ああいと十二月二日

本店宣長

詞の小説目録

○一の毛

物論 九の毛

三轉流哥・ナヌの毛

志  
き  
ひと  
ナヌの毛



○二の音

とまうりよと上へうつてふをとよ 一うせんじ

まうりよとふとと せへゆう

變格 ハセナリ

車すゆつし機 古ナカニ

とふをは不個す 十ニのりく

一車にてふをもを穿へ保満す

○三の音

そ 六ヶ條 一のりくら とも 三のり

ぞ 四のりく

とも 三のり

あ 五のりく

あ 五のりく

て 五のりく

あ 五のりく

せ 五のりく

ま 五のりく

ま 五のりく

ま 五のりく

せ 六のりく

ま 六のりく

ま 六のりく

ま 六のりく

そ 七のりく

ま 七のりく

ま 七のりく

ま 七のりく

ぞ 八のりく

ま 八のりく

ま 八のりく

ま 八のりく

の 九のりく

ま 九のりく

ま 九のりく

ま 九のりく

と 一のりく

あ 一のりく

あ 一のりく

あ 一のりく

や 二のりく

や 二のりく

や 二のりく

や 二のりく

や 三のりく

や 三のりく

や 三のりく

や 三のりく

や 四のりく

や 四のりく

や 四のりく

や 四のりく

○五のと一

○五

や 欲身 八のひくと

や 大底

まや 大のひく

や 雜二ヶ條 三三のひくより

や 本のひく

まや 本のひく

か 五ヶ條 本のひくより

か 二ヶ條 大のひく

か 二ヶ條 三十せびより

めうも 本のひく

くふ 本のひく

くや 本のひく

何のれ 八ヶ條 本のひくより

あふ 本のひく

あそ 本のひく

いづき 本のひく いづ 本のひく

いふ 本のひく

いふ 本のひく

いづき 本のひく いづ 本のひく

いつ 本のひく

いく 本のひく

ゆそ 十二ヶ條 一のひくより

ゆそ 二のひく

ゆそ 三のひく

さととと 本のひく

さととと 本のひく

さととと 本のひく

さととと 本のひく

さととと 本のひく

さととと 本のひく

こ 十ヶ條 土のひくより

こ 二ヶ條 本のひく

ご 十七のひく

を 四ヶ條 大のひく

お 七ヶ條 十九のひくより

て 本のひく

て 本のひく

て 本のひく

あ 四ヶ條 本のひくより

み 二ヶ條 本のひく

よ 二ヶ條 本のひく

ゆ 二ヶ條 本のひく

○ むのを 一

〇 六

助辞 三のひく

三ニ條 ホヌのひく  
ヒガのひく

らく 壱のひく

まく 附 ■ 壱のひく

きく 附 ■ 壱のひく

かく 附 ■ 壱のひく

○六の毫

もととびあくを

志き 一のひく

あき うき あれ 二のひく

ぬき ゆき ほ乃ち 二のひく

つ つ つ ふのひく

紐庭寺十九院より寺成二十院までの事

ふのひく

んめ 八のひく

らん らめ 八のひく

きん きめ 十三のひく

さん さん さん 十三のひく

キ 十六のひく

ら らめ 十六のひく

侍 さつひく

ら 附 ■ さつひく

ぐ 附 ■ まのひく

かみ 五四のひく

七言毫

古風

美榮寺中てふをほしがつてう 三のひく

同集中てふをほしがつてう 二のひく あのひく

日本書物語一つの捨 ハラキ

日本書物語ふをはの訓を譲りす

古風の辞づひ 土のじくすり

を くと 不も トよ

ぞ そぞ ぞも 十のじくすり

の 十六のひ

や や や キミヤ

か き うと 土のじくすり

志 よ や や も トと

志 よ や や も トと

十七のひ

か 営のひ

ふ

古ふのひ

(玉のひ)

八

まごのやまと辞

土のひ

らむふを署く格

土のひ

みよまふ

土のひ

そ林

木ふのひ

そ林

木ふのひ

そ林

木ふのひ

詞瓊論一卷



○文をはき。神代の文は多くはあくまでもそぞりて、その本末をくわへあくまでもそぞりてあん有て。うがくせきをもとといふ。中方は不どまるとかのづくとくのひく。たゞゆーはをくわくことよりては。方をもくろむ。このそとのへをやまつて。やまつて。おもておもて。まづいのれをうゆる。おのと今此まとうにあくまでもそのまどきり成つて。まくをへまくをんみてき。

○近古代より或人。文を多く漢文の體字ぬれ。といづらばらにこまくやうかく。まくのとんじをく人にかねがり。まくみい

文章の部

本九の二ノトモ

そ  
そ  
本九の二ノトモ  
らく  
本九の二ノトモ  
く  
本九の二ノトモ  
まく  
本九の二ノトモ  
まほ  
本九の二ノトモ  
きまく  
本九の二ノトモ

とく學へあきらめ。あらすち程てふをはとくあるのふかん  
有る。まゆを。うかくゆの助字といふやうね。その本と赤  
毛とひして。かへあるすもとまくわなにゆるを。て  
かをもたし。ふけり。まゆはあくまで。いきとよがひと  
ぞのの茶そのを。さも何と。べくいふがと。うんたら  
え。いまと。とがくはうれ。近きまよへ。うくとも  
と思ひて。まゆがふくらむ。まゆをうれ。助字といふ  
ゆと。うれ。まゆのまゆひと。まゆは。け本末をばうね  
へんのとれひふくで。だぶおのぶんりのまくせつ地

まゆを。よくひまゆを。まゆと。門出うんり。や。  
○スマム。てふを。のを。走ぬのへ。走まう。う  
うずまく。とうじ。まゆのまゆのふもしき。まゆとまゆ  
まゆと。かくとも。まゆと。まゆと。まゆと。まゆと。  
へのまゆと。まゆと。まゆと。まゆと。まゆと。まゆと。  
こもと。それと。のひ。まゆと。まゆと。まゆと。まゆと。  
て。まゆと。まゆと。まゆと。まゆと。まゆと。まゆと。  
と。まゆと。まゆと。まゆと。まゆと。まゆと。まゆと。  
の。まゆと。まゆと。まゆと。まゆと。まゆと。まゆと。  
らひまゆと。まゆと。まゆと。

くまもとてとくらま。人をへるときもきりうし。ひふ  
し乃よにあがむつる。うそばゑうでへえうみ。おのづ  
のあくからうて。まきうつめ。かくさんをされど。かくそゑすと  
きもばをみます。まくらねまかうをば。あをうりとくもくべきふ  
うそ。まくらくまどく。まくらをたづめて。まくらとて  
まくらをひきべきふなを。

○玉手はのうのへき。まの本おをうみへわをせすいうーへのまを玉  
手紙やまくとくんむすこはもせれどふのとまくは紐綱  
とくよりのを作りまく。三條の大縄を結びて。まくとまく  
がくをうくらうき。まくはやぐれ此書は同縄のやうです。まく

きもの大縄をあしらひば。此ゆを考へんまほづのふのみと簾  
をかくらう。もう、まかく。うじてよしとへきうや。この三條の  
大縄をまくふうして。じまくとくくんちくおとふをはる。  
まくらくかのづくわくうふうとく。まくらをひきべきふ  
をなうし。

○紐鏡の三條の大縄もハ右そと徒 徒と大をとぞのやひもをくの  
び一條。中ぞのや 付 いふくさの結び一條。左まの結び一條。け  
三條もく。ことんでふをもが大あくらむぬひとハ言ひとがり  
をいふ。まくは一筋のまくらのまくらをうべ、がくの匂にまく。語の  
かくすを告めるらめうて上手がくすてふをはの結びき。まく

の三條ノリかて。あきらはばくは舞のまことりせよ。ふ上を

も徒のとひをカミとひをび。ぞのやといへどスルとひをび。あそ

いたをカミとひぶるくひをだりしとす。とす。とす。

こひをカミとひび。ぞのやとひをスルとひをカミとひぶと。又モと徒のいゑバ

さくむまカミ。ぞのやとひをスルとひぶと。さくうへる小

とあるなど。後の方は人龜牛と通じて、是ハ越後の山より五箇の内。左ニ海ハ右の山なりもて。絶  
び中の山なりき。左に海。格子を下三段もうちえて。右の山なりき。キの山なり。山の山なり。左の山  
然が。山の山なり。左ときたが。しづらうをす。ねまほんをまほん。左の山  
べきす。ぞのとひをスルとひをカミとひぶと。又モと徒のいゑバ

さくむまカミ。ぞのやとひをスルとひぶと。さくうへる小

とあるなど。後の方は人龜牛と通じて、是ハ越後の山より五箇の内。

とあるなど。後の方は人龜牛と通じて、是ハ越後の山より五箇の内。

とあるなど。後の方は人龜牛と通じて、是ハ越後の山より五箇の内。

とあるなど。後の方は人龜牛と通じて、是ハ越後の山より五箇の内。

とあるなど。後の方は人龜牛と通じて、是ハ越後の山より五箇の内。

とあるなど。後の方は人龜牛と通じて、是ハ越後の山より五箇の内。

とあるなど。後の方は人龜牛と通じて、是ハ越後の山より五箇の内。

とあるなど。後の方は人龜牛と通じて、是ハ越後の山より五箇の内。

とあるなど。後の方は人龜牛と通じて、是ハ越後の山より五箇の内。



わくの方へ上り **や** とうゆゑふ。切口てあむきびとみどり。大き  
こまくをりて。おれのばく **ぞ** の **や** **何** の詠びのやう。いつとも限を  
らへもべく。かくばもべく **た** **も** **徒** のじまびもむ従のあがふく。  
切く辞。 **ぞ** の **や** **何** の詠びを。おれこそ。つゆまへはづく辭とんむ  
だれもよろぐのてふをはあぐと取。中。の辞みて詠ぶハ。は。上りぞ  
も。上よけ四つてふをもみれを。ち向ててきて。切口もるし。ゆきを後すふすうてハ。ば  
ま。ま。上よけ四つのうちのふをはをかくべく。ゆげお辞を詠ぶとおぞく  
い。そそかのうは定まりに遙へうううあふ。もとぞのそ次。一首のさがくとくま  
い。也。文章スハ近代と云ふけあやまつかり。さくハ。せのあひ文集。於もあくつ?  
あいよをあよまれみり。まこと。てふをのうのうと。うのをくると  
も。じ二つのうりごにあふとまくまく。 **た** **も** **徒** の詠びを。 **ぞ**  
の **や** **何** の詠ひも詠む。かくぬもうか。こよハ。うか。むも焼身

**三行** **く** 行 **け** 左 とう。絶うとお十一行。ま。げほくの辭。とハ。切くふを  
ほくふをえ一つ。かく。ま。と。上。うつすがまく。ま。と。く。切  
きふをほくふをかく。かく。切。きふをほくふをほくふのへもうう。切く  
く。のう。切。てふをはのうのうと。え。のう。き。は。い。と。と。ら。や。ー。に。言。靈  
のう。う。ま。に。あ。う。う。ひ。ぐ。に。ま。き。う。か。ー。次。う。左。の  
行。の。う。そ。お。詠。び。き。た。う。そ。う。う。を。く。取。

○上の件はまくと。よく。まくめえもん。ハ。あはてふをはのう  
の。へ。まく。たと。ん。り。か。あ。あ。あ。か。あ。か。う。か。う。か。う。  
あ。ど。ハ。あ。い。え。は。う。り。行。ま。め。ぬ。う。か。う。か。う。か。う。  
う。か。う。か。う。か。宣。長。が。う。う。考。

て。ひつてすまなす。むくは人のまにひかぢたとあれ  
を。いふらん。おきづくふくひをひきて。おがみはうきひ  
き。おひめ人をさうくばりぬべきより。かの大縁の二條のほく  
の三轉の縁あり。三轉とハ。上のてふをとよもき。一もの三三まふうううをつぶし。  
ふも。おきまかづくを引ぬく。以下につぎくほくひうきて。お  
あらぬわざ。かん人たおじ志先く。かづくことみあいの人のた  
称の定まりにて。ゆふたのがちねまくはなわぬてのよし  
と。おとおやう。おびる。おをかぬ人も。おふべ。おまごと。お  
そくめうりう。おづみ引かて。おもせううみてよ。またおんじすはなづく  
あらぬわざ。おづくらみてなべき。

○まくは書ふ。ほくひを三時。或ち絃び辞。或ハ変格。ほくひを歎息のや。まくは  
ふもくひの名目ハ。おのび今う。くにまくはるし。まくはをくちくきへさ  
ととみハ。まくはれ。何とお名目をたて。すをヨクで。ハ。おふ志を。ぐくに。す  
か不うあり。やむとえます。おもふまくけて。おを。ぐくに。人乃耳を。ふうく  
んと。おもくうおとをこのえて。コハ。う。まくはれを。と。あかりひとか

三轉證歌

志行右

き行中

ノヨ左 紐鏡末一役

の	徒	そ
の	徒	そ
(回十二) むすりして地をありへど秋の因せいあとのよとつ人の ○のの旅びみて。あうをきて切きとくまへ。まことくらべ。おこ うち下はき。きにきをもあらば。すうのいくまれふらぢみは別ぶの祭出せう	(回九) 秋空ハ老ありるきてみちもか(ぞ)き(ぞ)さかんてそ人一音 <small>なご</small> を みやこ出てひよきよせとひよれをひぞかねてひよるん人さ(ぞ)き かくをうりきとひよれをひぞかねてひよるん人さ(ぞ)き のうりあくち(ぞ)き(ぞ)き のうりあくち(ぞ)き(ぞ)き	(回四) まうじをうりてすよせ山

左	中	の
左	中	の
(回十四) たそりして地をありへど秋の因せいあとのよとつ人の ○のの旅びみて。あうをきて切きとくまへ。まことくらべ。おこ うち下はき。きにきをもあらば。すうのいくまれふらぢみは別ぶの祭出せう	(回十一) や や や や や や や や や や や	(回二十二) かくをうりきとひよれをひぞかねてひよるん人さ(ぞ)き のうりあくち(ぞ)き(ぞ)き のうりあくち(ぞ)き(ぞ)き

志右

志中

志左

志左

右	左	中	右
も	草	の	徒
後三 はうりあをすすきせん	花のちよと	日二 ひやく	色
足に	や	日二 ひやく	そ
五土 からだりあひんねぎとゆきをすみよ	よび	日二 ひやく	徒
	一き	日二 ひやく	色
	志	の	後三 ごうせことを
中	の	ぞ	むか
あり	や	ぞ	と
た	何	徒	う
第三候	す	徒	う
	き	の	後三 ごうせことを
	右	の	むか
	き	ぞ	と
	志	ぞ	う
中	の	徒	う
	あり	徒	う
	た	徒	う
第三候	第三候	徒	う

○ものと一		○十八	
徒	毛	も	左
徒	毛	も	左
徒	毛	も	左

(中)

や の ぞ

(右)

徒 色 そ

○ふのを一

〇十九

て て

てき

そひつと昨日をうそ  
かうかく人をあふくぬぞまけあはる  
かをめとくじくにそとうどきめてそくひひてき  
りのをやうとてき  
せんをほゆくゆくもめよく  
ぞ人をそしそそて

(中)

の や そ

おふのとまきくみのひよりと秋乃をとばす  
おのひふりとえてぞゆうふし  
まきへりまづにじにて  
おふらしやさりありゆくのサハ儀きたりえ  
おまめ  
部 ふまめまよや きだりえ  
おまめ  
八きながくあもくくぬふまきめ  
おまめ  
おまめ  
神代たりいくようをホー  
をとめこが神事じ乃みゲ垣乃去  
ホー

てき

てし 中

オ五便

そ

おまめ



豆 右

豆 中

豆 左

豆 右へ戻

豆 右

人 人

人 人

人 人

人 人

人 人

人 人

人 人

豆 右

豆 人

豆 人

豆 人

豆 人

豆 人

豆 人

豆 人

豆 人

豆 人

豆 中

豆 人

豆 人

豆 人

豆 人

豆 人

豆 人

豆 人

豆 人

豆 人

右

豆

豆

豆

豆

豆

豆

豆

豆

豆

豆

四

豆

豆

豆

豆

豆

豆

豆

豆

豆

豆

豆 右

豆 中

豆 左

豆

豆

豆

○ まのと一

○ まのと一

豆 右

豆 中

豆 左

豆

豆

豆

豆

豆

豆

○ まのと一

豆

豆

豆

豆

豆

豆

そ

み

か

人

も

そ

の

ぞ

徒

も

そ

の

ぞ

の

ぞ

そ

の

右

中

左

右

や

ひ

そ

そ

の

す

と

お

う

と

う

の

そ

は

そ

う

と

う

の

そ

古十九

日大

後十八

千四

古三

原民林松

四四

秋風

ふもつ

山

を

と

く

と

こ

と

あ

と

う

ぶ

よ

う

と

う

と

う

と

う

と

う

と

う

と

う

と

う

や の ソ

ツ

ハ

カ

ス

ツ

カ

ル

ア

ク

ル

ア

リ

ル

ア

リ

ル

ア

モ

ミ

カ

人

も

ソ

ツ

カ

ル

ア

リ

ル

ア

リ

ル

ア

リ

ル

(右)

徒

立

立

(左)

立

源氏もとみ

ひきだもとくねはひよねか一てひふまうお

たと

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

(中)

徒

立

源氏もとみ

ひくは

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

徒

源氏もとみ

ひくは

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

徒

源氏もとみ

ひくは

立

立

立

立

立

立

立

立

立

立

(右)

の	そ	徒	も	そ
の	そ	徒	も	そ
の	そ	徒	も	そ
の	そ	徒	も	そ
の	そ	徒	も	そ

名前

名前

名前

名前

名前

名前

(左) 中

を	何	や	の	ぞ
を	何	や	の	ぞ
を	何	や	の	ぞ
を	何	や	の	ぞ
を	何	や	の	ぞ



中

右

左　中　右

みくらひのうときやせあゆむけ本の下左　みふまき左  
风ハ篠含ム大木

みやまふ左　かきふ左　あぐれのままた仙人右　みゆみ右

春日望を左　かきやまを左　あめめあめもとこむり右　かき右  
正月月小竹枝

なづけにあ左　こじき左　圓ぐハちのえ中　かみ右

ひそりともとくわめある人左　かうのん本　浦河右　くすと右

秋を浴て月をかげし左　みだの萬葉右　みくら左

かくづ左　みはまき左　まゆ右　いもちの萬葉右　みくら左

かくづ左　みくら左　木とくべきと梅先左　あらしの　徳ふとま右

かくづ左　みくら左　えまくざりきみはん右　みくら左　かくづ左

○ものを一

○十六

左

中

左

の　や　和

ほりよはみ左　ぞ左　山吹の花右　下ゆく井左　よもれ右  
はた一

うふねの室をや美しやく右　まねの山左　なまこはいき右  
内二

ま處左　見也右　を元までり石を花きに室にま右　あく風右  
内三

黄やくさき左　やまやま左　部云々の在右　あるがくふたく右  
おなし

たふるのひうぬあともゆーたをりす右　あどうゑだき右　せる

まゆ

まゆ

まゆ

赤十八段

(中)

の や の そ 徒 と  
 おとて と とくぬ 住のえはきのむねいくよるる  
 美をもかくと所をもうひつまの花りにまくいゆ  
 横弓ひしてらきをそとる 月日こへあくはよまつてん  
 秋きみと見はるふりゆちのまふぞふどうきゆ  
 合ひしらふだまつまほ 日ハ空ゆる ひをせをばんすら  
 ま川を六十にうりやをあひ川の まわがうりゆ  
 山あらに木のまきもさうり尾上の月ふる や うけゆ  
 あひとしり往 や とゆ 秋のまふたときまのむちのむ  
 おとひもつとし おの榮ハ いつ おとゆまうりゆ  
 おもていくりへゆ 及引乃よりのまめのむ

(中のと一)

〇九七

(左)

を そ  
 すのやうつみとあひゆとちうひがふと まういぬ  
 年ゆどばよひ 月 ひいぬ あひあひとをそとればゆひもあ  
 と すに川のかげくまくまるとばくまき月の秋ヒ うじぬ  
 ま

ぬ 右

ぬふ 中

ぬき 左

ナ十九

(左)

キ

古四  
後ね三 太くめ秋うかにとど二 うき地とひをぬ  
ゆみよ アリ 敷つり ムシ 部ふきくほともうき一ふくふう

つ

右 つふ 中

つき 左

オ二十便

(右)

キ

後云  
花元みと出すりと秋の壁け音にまとめてふ もくじつ  
ホミ 左十九 好き 左十九 立てつ 左二十 ひきふもともがまつしやひとあるくもくべく  
後ね三 卫ヶうとうちめふべうりんぐまくちくへ日浅ふとくじつ  
古三 好きへとたまきんと 左二十 トヤギリ 左二十 とひかとぞまえてをき  
後ね三 今うちへあくやうこうましますか 左一 花のみやふやしう定めつ  
古十七 正かこうあづみとつ 左一 うるすやふや俊山ぶつる月をみて

(中)

キ

古二  
コ二 らのふトアホこぎまとてほつらうをせき ぞう おつト  
ゆき ゼ ぞちひでむり ト 年の内小きへいくとらじとるへ  
良もけバアホあそめあでうきひのまきふはてせかをやくつト  
まちをあきる人アホ ヤ や立なびアホめられあをやしそめつト  
みやがてよ アホ ヤ キつト やもなびアホめられあをやしそめつト  
喜びかううばふひしたの枝アホ タ あやごりの枝アホ タ  
古一  
四十七 たきト くもとよてそや ト 喜び立うくもんふのこうくま  
古三  
四十七 ふき川はふくはくのとまねのくふ アホ 五歳まちあり ト  
うべあうおをアホ モ をくをとト んト ぬきあが新アホからうひ

(左)

キ

○のを一

○六八

(甲)

や

の

ぞ

いあくへと今をん乃かきをぞうにきとままで年とのあ  
 捨すてもいもであがめてぞあむ ふゆ乃花すゑそらぞうひゆん  
 ううざりく神かみのやあんひたまのさきこれち  
 ほくぎするき景けいより生おはなし山さんのよみめのわ  
 いづへのうらきなくやあくふきん ねそーひとの終てをくわ  
 うう引ひのふらうききをつぶとこや 空そらこしつそひだふく  
 ぬぬじやかこうひままふくりや ももうままめぬくかわく人のみき  
 みみををあきとくこととくとくのば やよかでうぬのせためくく  
 ぬぬ乃の波はぬぬききてて やよままうう 凡ふくまるるををももたたうう

の玉のを一

〇六九

石

徒

ぞ

かかららりりををぬぬのの ぞぞ ははべべののももややべべののびびりり  
 ののややははままととねねどどああととりりととうう ひひくくまませせ ぞぞ くく  
 ききののああししけけ風ふををままれれぐぐくくへへくくななばばびびつつ ぞぞ くく

高	本	得	寢	徒	右
さ	木	く	く	く	中
さ	木	く	く	く	中

ちちくくくくくくをを おおたたにに はは中中にううううれれ

此こ度どうう下下おお一一度度まま。合あまま十一一度度。右右行行もも徒徒のの港港

うういいととくくああききをを。ううべべハハ累累をを。ううややににををううししくく出出せせ。

ううららううががううをを。ああくくににををううししくく出出せせ。

(左)

モ

石十三

もとよどきとき時を

の

ひ

の

れ

め

徒

右

左

中

左

オカ四版

○オカ二版とオカ五版が合せていく  
事をへて葉の下あえて一と老とつともして

金口  
古文  
三版  
左  
三版  
川河  
かく  
みじう山お紫らし族人の変せをうすく移行とか  
神吉月あらぎのゆをたてぬきふーて

○五の五一

〇三十

(右)

モ

秋方下

里によかどをしてうねうまをなきおとを宿る

秋のレ

左

か

か

か

か

か

め

(左)

モ

秋方下

家宿ちきの余みのくやつての

秋のレ

左

か

か

か

か

か

め

徒

右

左

中

左

オカ四版

○オカ二版とオカ五版が合せていく  
事をへて葉の下あえて一と老とつともして

金口  
古文  
三版  
左  
三版  
川河  
かく  
みじう山お紫らし族人の変せをうすく移行とか  
神吉月あらぎのゆをたてぬきふーて

○五の五一

〇三十

左	中	右	左	中	右
幸	や	の	達	を	ぞ
六るま 月候ま	あく風 候十六	いつ 乞風どば	さう か正月をうそをばつきゆうい	さう か正月をうそをばつきゆうい	さう か正月をうそをばつきゆうい
あひて今 そらまち	そらまち	そらまち	人をまじめしよがつゆうたまうを	人をまじめしよがつゆうたまうを	人をまじめしよがつゆうたまうを
おとへをうづ	うづ	うづ	のふき	のふき	のふき
小秋原木	小秋原木	小秋原木	葉乃多く者	葉乃多く者	葉乃多く者
幸の至一 ○	幸の至一 ○	幸の至一 ○	三	三	三



たきぞみのすをねむざもすくホムルモビのふとあ

右 佐  
中 佐  
左 佐

何

毫

毫

中 佐  
右 佐  
中 佐  
左 佐

や の ぞ

ふ 右  
あ 右  
ふ 中  
ふ 右  
才六八所

ふわぬりてをまよ衣の赤ひものもくおとせかき  
うつまゆのおとせかき  
わいをじうそおとせかき  
うなよの美乃もむれ

何

ヤ  
ひきそ  
や  
たきれひおとせかき  
神のあまくおとせかき  
いのとばうをおとせかき  
ハタガ  
ア

シ  
シ  
シ  
シ  
シ

毫

イ  
イ  
イ  
イ  
イ

佐

イ  
イ  
イ  
イ  
イ

徒

イ  
イ  
イ  
イ  
イ

右

イ  
イ  
イ  
イ  
イ

ぞ

イ  
イ  
イ  
イ  
イ



俗

こうくまとてたまりゆう いづこらハメアモル イム マアモモキケ  
本番ニシテ主事  
み月をふとまれつてきし野山ぬとみそ てそ 一も生 ゆき

左

みすうじよ そも ほりまとありい イム とが地圖と 宿泊 梅道と

俗

古 中  
ふき 左

オモ一役

左

宿川 ほりまつて 緒とるは うけ そとすゞふあ祭らす そ 懸まる  
六るま  
月夜よそ こな人まわる うんくうりふとゆくさんびつとほん  
花をうやうめをととし そくま  
立田川 ひだをさる お 木葉のめじうけふのめあわせ

左

の川 すねみをみて おととをかうりそと月ぞ ながる

右

支衣 すにあうそ れまろ えと うじもおにちらりゆく  
中勢未

ちの石は英はうつ都はよき生と依保山のうひやらそ  
きよ  
美うふまうかくうきゆくはあやいをゆる人や そとそ  
吉四六始

むかごと今や そと う川 うそ お主てみちうけふ

いくよくとうじゆく ふまを そと とかくらふまるとふらひそ  
大和おけ  
えとえどもたきとあくとこひくそ  
吉四六始  
いせま  
りとまともハ松そ そと おまるそ あらまどう  
やうまどう、つんこどへ

左

中

左

古

うふ 中

うき 左

オモ二役

○ものの一

○五五





(左)

木

東

15

徒

も

あきの秋は月と季とどろく秋す  
徒の秋は月と季とどろく秋す

○ひのを

あきの秋は月と季とどろく秋す  
徒の秋は月と季とどろく秋す

ふ

右

へ

左

身のあは

あきの秋は月と季とどろく秋す  
徒の秋は月と季とどろく秋す

○火

秋

古

あきの秋は月と季とどろく秋す  
徒の秋は月と季とどろく秋す

(右)

徒 や の そ ほ

徒の秋は月と季とどろく秋す  
徒の秋は月と季とどろく秋す

つ

つ

(右)

そ 徒 も き

そナガハ  
徒タチ  
もナガハ  
きタチ

いやうふあきちでのゆきを 手タメあひ  
いタシ  
かタシて

○五のを一

○九九

ひ

右

光

左

オハセ

ひ

(左)

(左)

そ や の ぞ ほ

そナガハ  
やタチ  
のタチ  
ぞタチ  
ほタチ

あひめとくみどりともうぐひあみぬまくはあひとぞ 足タチ  
行カムむとひづナガハとぞタチをすらタチよみ  
十五タヂナナ  
夕タヒテや秋ナツのうきこくタマツんタマツ神ミツのタマツと  
まのタチに食エラクのタマツあうタマツば年タマツをかくタマツ有タマツとタマツやタマツふ  
秋タマツを月タマツうべとタマツやタマツふタマツりタマツだタマツのタマツじタマツよタマツうふ  
まタマツじタマツをひタマツとはタマツふタマツ多タマツいタマツおタマツうタマツふタマツうタマツ  
秋タマツ衣タマツ乃タマツをタマツとタマツせタマツとタマツばタマツすタマツとタマツアタマツそタマツへ  
キタヒキバタマツトタマツホタマツヘタマツ梅タマツウタマツトタマツうにタマツけタマツ取タマツく

(右)

○九九

(右)

や の ぞ 徒 色

はやうす

はやうすの病えを思ひやる

る

まごとそきりおとやくる  
タマモをうなうらし  
万十ス  
あきべとをかく人のびる  
うきちらねのうみきひがまとよみに時の便  
まくのめこの木とおたちぞよ

おみまてあはきとよき  
あきとみつわとおもむけをと

ほさきときての織と

や 写る

○五のを一

つ四十八

(左)

行 や の

ほゆせ業ア  
よとくめぬよとくむりほくやくとくくわまきをや  
ほじ  
法古ふ  
法もくきつぬをやし  
秋なめふきに承へるもくくし  
かく  
喜びでりかねしきふくよよくもぐりゆく時  
たゞ  
因ふうを  
喜びてりかねしきふくよよくもぐりゆく時  
たゞ  
因ふうを  
めあだく成なふ  
すりや  
まゆのまゆれきむ地へひりしをせど  
なだり枝  
とたきめ  
葉は葉ふ夕暮るぎくめくやまん

弓 左

き 左

方西八段

左

後

ひづことをめかうりへきくくまくもくのひ  
右ふ

る

右

の や の そ 伎 と

とくへんて とあわん うらぢを吹ふらひそひかわいのゆ  
同一  
山とくみ人ときとめぬとくまじくとがじそかえむやさん  
同十七  
かどみしりとえたりてそてゆるん 年へゆるおへひやーりそ  
後七  
もづくりそよひひのそくおとばちよお秋よそ 陰ハモギン  
後八  
もづくにあきいそおおそもあぞるん をごめね津の形ではなとそ  
内十九  
よあはむるながおはれとつうきり今へごがれを るふにとへん  
内十七  
もづくにあふよけまん 唐衣たりせゆるみたそと「もは」を

左

の 堂

遊はざましのときとぶりやまと いど とみのらぬくさまる  
同二  
花うちりのやどりへたきうもろ あふおへよゆきてはん  
同土  
あけそそばほのまきまへらくらしとハかるのりえ こそるき  
同十八  
きまくねやらひ こそまき みませ川をあはせておひそりせん

ん 右

光 左

才刀九段

こきようりト五度のそや舞ぶ。ひりへそかざして。せんとひおへ。オセセは。の  
たくふもと唱る言と。まきれぞしらんとそにまくの。冥ハモセセ  
同四  
月夜にそうとそ まくろん おあくねまとのほへううひなそ  
同五  
船方ハナクねまとまくのねひのねりおまよをそそと そそん

左

室

内

内月承ひやつるきをかう一聲ニモ叶浦とひきをそぞれ

日暮

吉野川トヤ人モツテウメヨクシロシテム

らん

右

らめ

左

才四十便

七

方

方立て多岐きく於レ是の行くよの原をよりちぬらん

後ナ

橋立テ承身をゆくううぬらん

後ナ

ミケホー馬がりくうばたまれねをあらまく者と見るまゆらん

後ナ

みづく生ヒヨクアツヒラん

後ナ

またひくの様立テスモ日敵をぬれを

後ナ

らしきもくらはなわヒ

後ナ

秋もくらめのうきり体をもくほくらん

後ナ

いともくへあきるらん

後ナ

もみくみの林ぬよあらすまけぬ根安

七

也

もあらすまの林ぬよあらすまけぬ根安

後ナ

徒

後ナ

もあらすまの林ぬよあらすまけぬ根安

**きん** 右  
**きめ** 左

考四十一段

左	そ	の	ぞ	徒	色	そ
す十七番目						
行と風とさうめ若けのや小あはくをすりと						
秋日宜秋つ春丹後						
荒のえが行うぬととせとあひきん						
あももえとえとぐえたてといへ						
あももえとえとぐえたてといへ						
あき人とふりをぎりきん						
うちまくタの處をきくれと						
古十八						
月落ま						
千みる春						
うの道をみのり月夜とありひきん						
万十九						
かどようんと代のとめとぞ小ねゑをしわむらもいとひきん						
かどようんとてぞ別ときん						
あふう遊波の浦をみうき						
涼室を生は西本の梅乃ちむのわをふくわうおとくにあれえめきん						

左	や	け	の	そ	徒	色	そ
後ナセ							
ゆくちめハからくとくとくを玉け玉が玉聲をあて							
や身きん							
行ニ							
えふくとよしれん人や入アキん							
とふうたくと、なく教ム							
門ナス							
東城のよやのゆふあくふ							
あこく人をなりひあきん							
門ナス							
あくと川あふみかくととくのきん							
あくと衣きくとしめしんとニじし山の里とありきめ							
うふまで形えとそとそえきめ							

左	なん	左	右	十二段
かくらとみひぐとね本と				
うもとがふあくとあん				
さあくとあん				



右

佐  
の  
や  
の  
そ

ちくまよとくとん　まき竹の一よはねり　ちととアトアレ  
 うととてれひぞうたうつせとのよをばきと　や　只ひるー　てん  
 えとつミ　や　立くじてん　こうむらうきと　しむうひ　かみがバ  
 ま　日せのうづむのせむ　あてとよいま　いくうきて　よみつミ　てん  
 おきこゑま  
 ふざく　む乃りう代　たき　と　てん　いくよの花のまくわや　まくバ  
 ちりぬき　べ　すきど　ほきし　まき地を　と　も　様をく　ばをり　てめ

左

毫

や  
の  
ぞ  
徒  
毛

立田川　あくき　まゆ　まがる　と　ひのり　だら　と　今　そ　ち  
 さ　ゆ　か　と　東　と　え　る　ら　一　原　の　め　ま　す　と　下　月　く　く　る　と　の  
 お　十　一  
 喜　の　ふ　く　あ　と　ま　ま　く　流　節　こ　う　み　か　く　と　お　う　く　ら　一  
 ほ　氏　ま　く　め  
 そ　と　あ　こ　と　神　ま　じ　な　ら　一　天　は　神　あ　ま　き　め　友　よ　り　い　へ　ぬ　き　ハ  
 お　え  
 ま　く　川　り　め　だ　祭　あ　び　の　み　し　う　の　心　よ　志　と　あ　ら　一  
 み　く　生　の　ふ　の　と　と　と　あ　ら　一　や　も　ゆ　を　ま　く　ゆ　ま　く　し  
 ひ　の　り　り　め　だ　祭　あ　び　の　み　し　う　の　心　よ　志　と　あ　ら　一  
 連　保　四　年　三　月　き　あ  
 み　ま　ま　く　の　ま　ま　く　神　ま　け　て　み　ま　ま　く　人　の　か　ま　く　ら　一  
 お　れ　め　だ　う　の　は　ふ　を　ぎ　れ　ま　ひ　う　へ　ぎ　の　や　あ　ぐ　ら　一

きてつるやもれゆうらーみちふいぢゆざをじゆーうりる  
あゆま  
東城やどづくめ橋とうちまへるいくへうむ地下ホウラ  
おゆえ寛和ラ  
も川めああよけ山里いりあらーもし人まや神のゆくらん  
松の林ア風のあらべをまさせてハ三田地  
秋もかくらーぬきみまく人トキわらーもくもれまくもちくう神のせまでゆ  
もと後ぞのやうこそいづとの旅じるときハらーのミ  
よして。他の緯トハ傍るきことなき。

を  
梅  
古  
さく  
さく

の 徒 と  
ゆうゆうのやうと花とをほつりあじゆゑとひりまえ  
高ヤ  
やどりせり人のやくにうあぢをゑとすれぐれあくひつ  
四十三  
花びとたかぶきくこひばあをくしめ下ゆふるのじとが  
おたえ  
じをのふをすうとほけまくどろく人まゆるのゆ  
つ

きの上を。ふのめくとと達のうり。ぞや何とそとゆア  
トハ。トと達ぶゆか。又トハかくすてハ切とくわ  
あ。あうとそと達ぶゆか。

あきへども下にまをあくとて達ぶゆか。しけかにてふゆ  
知ハ。かきく達をとば別じ。ちきハたのものほのゆせら。

かみ

○云のを一

○四十七

も  
消せりのをさうりとすしてものほる  
あら古の生とつりとるひるらすやのゆもへるく  
をちこちめとづきともねらかにがつうくとよみこもる  
日也をまへしろきくとるる  
徒旅人旅人の旅の旅の旅の旅の旅の旅の旅の旅  
かくとふみの旅の旅の旅の旅の旅の旅の旅の旅の旅の旅  
いづはあのゆとすう  
るの上高きのゆくもとほの高いぞや何トそとゆアモテハ。  
かくとひよぶとす。そとひしてると然だうあ。いあひこ  
くうううう三のナのその物のの物のの物の

○上件の後。又ニヨリを次。モべく其書紙中に印御了後奇  
も。いづととまざれ古のえし。モハ後撰稿とり。づきくおあゆまで、  
勅撰の系をしゆくとと。モハとれて來きかどハ。ゆきととゆみ  
づきのたりき。撰の系はよあくでりれどし。すかたたゞ  
そとうと。莫なれ六六帖をとと。御のもうひ。あくけ系あどふと及て。  
撰の系もおお勅の撰とりと。ハ代系イ入る了る人のやうに方をうりて。  
きの後の人のいをもくらば。かくゆとうんどもはいふとい  
ふ。たとくくああめめを。ハ代系イとうざざ。たとくくはいよ  
一なれれを。モととと。一一代代きりとはせき。又とはと撰の中か。小よ  
おお祭まつりとと。モととと耳みだだにとづきをくをば。モととと

ふあちきてハ。ヰミにてふきものとのへをりやま。つゝハ訓の誤る  
を。みまにすうかとせよとては。も。むかてのとがわれど。もくを  
うづ。

○上の件、候。おもふ。而く佐うち御闇。おもぎも。おのづく語乃  
よりこぬ。おまことおなまきとらべく。又おのが考へり。せよ。といふくへ  
りとば。被あひぬ。まよの。お合ひ。首。あと。むくろまよふりとを。お。おや  
こむ。うれし。おのじ。と。うと。おど。ほ。後の人考へ。かくいんす  
かきくをしてよ。

○古手を引ひ。かくら。古今事。う。ハ。古。後。疏。後。接。後。接。ハ。後。  
金車を。令。初。ひ。ハ。洞。チ。載。と。千。お。た。ハ。舟。新。船。疏。モ。新。船。と。モ。せ。り。ガ  
と。こ。も。く。お。あ。び。く。か。べ。し。又。下。に。ね。の。か。く。を。う。せ。ハ。お。の。も。の。つ。ぞ。し。



